

言語変異をめぐる視点：I- 言語学から見た社会言語学

三 宅 正 隆

1. はじめに

社会言語学は文字通り社会学，または文化人類学と言語学の共通領域であるが，どちらに重きを置くかで社会言語学，あるいは言語社会学という言い方がされる。もっとも社会学では記述的あるいは言語との関わりについての考察にはあまり重きを置いていない傾向があり，¹⁾ 言語と社会の関係はもっぱら社会言語学の領域で研究されているといい状況にある。

社会言語学の分野は理論社会言語学と応用社会言語学といった分類もされるが，そもそも注目に値する理論に乏しいことがある意味でこの分野の特徴とも言えなくもなく，この点マクロ（または大）社会言語学（macro-sociolinguistics）とミクロ（または小）社会言語学（micro-sociolinguistics）といった分けの方が適当といえる。実際，言語学の各分野についての総覧的な論文集を出版している Blackwell の *Handbook* シリーズの社会言語学編 *The Handbook of Sociolinguistics*²⁾ ではこのマクロ，ミクロという分類に従って章立てが行われている。ミクロ社会言語学は狭義の社会言語学で，主として方言学や音声学などに関心を持つ言語学者によって研究され，特に言語の使い方や言語変異に社会構造がどう影響を与えるかを，例えば階級や職業，性差，年齢などとの関係で明らかにしようとする。一方マクロ社会言語学は社会が言語に関してとる態度や評価，力，政策にかかわる事柄に関心を抱く。具体例としては多言語社会における言語政策や言語計画，公用語の問題や言語教育，言語権，言語消滅や言語保持，バイリンガリズム，などがある。

マクロ社会言語学は言語社会学といってもよい分野で，特に言語とは何かといった本質的な事柄が明らかになることは期待できないまでも，ミクロ社会言語学についてもどの程度言語自体について有意義な知見が期待できるかという問題がつきまとっている。それはまず社会言語学と呼ばれるにもかかわらず「社会」という概念自体が明確に定義するのが困難であるのに加えて，「言語」という用語が多義的に使われるにもかかわらず一般にはそのまま定義されずに

持ち込まれていることから生じる。これが社会言語学の自立性を主張するのが困難な主たる理由である。

社会言語学の実際の記述や分析では「英語」、「日本語」、「中国語」等、いわゆる「個別言語」と呼ばれる言語の他に、英語であれば「標準英語」、「黒人英語」、「ピジン英語」、などの社会方言ともいえる変種に加えて各地域の方言（ボストン方言、ニューキャッスル方言、等）が考察の対象となるが、面白いことにはほとんどのテキストが具体的な分析や説明に先立って個別言語や方言の境界は言語学的に定義できないものであるという点を力説する。例えば、長年社会言語学のスタンダードなテキストとして使い続けられている Trudgill (1974) やこれもテキストとして評価の高い Romaine (1994) の第一章はほとんどこの目的のためにさかれている。Trudgill は言語や方言の名称、区別に関して次のように説明している。

The criterion of 'mutual intelligibility', and other purely linguistic criteria, are, therefore, of less importance in the use of the terms *language* and *dialect* than are political and cultural factors, of which the two most important are *autonomy* (independence) and *heteronomy* (dependence). (1974: 4)

同じく Romaine (1994) も「これほど重要で基本的な概念を、言語学者でさえ純粋に言語学用語で定義できないと知ったら、言語学者でない方々には信じられないかもしれない。この章の目的は、言語や方言という概念が基本的にはなぜ社会的なものであって言語的ではないのかを説明することにある。」³⁾ といった具合である。

このように言語や方言が明確に境界をもたず、便宜的な分類名称であるにもかかわらず、どちらのテキストも続く章では世界にはさまざまな「言語」やその「方言」が自立的な単位として社会に存在していることを前提とし、社会の中での言語使用のされかた、機能、また言語に関わる政策を論じている。したがって、一見妥当な議論が行われているように見えるが、ミクロ社会言語学といっても実質は言語の社会学であり、興味深い現象の指摘や記述があるにもかかわらず研究対象とされる「言語」自体が曖昧な概念である限り言語自体についての理解を深めるという点では、多くを期待できない。

この「言語」という概念が純粋に言語学的に定義することはできず、社会、政治的な概念である意味便宜的な通称名称にとどまるという限界説は「言語」という用語の多義性に起因するところがある。つまり「言語」には自然科学的概念としての「言語」も含まれるからである。この「言語」という用語が持つ多義性と言語学との関係については Chomsky が自身の提案する認知科学としての言語学の研究対象を明確化する場合にしばしば持ち出す話題である。つまり社会現象として観察される言語は社会で流通するとはいえ、その源流は言語を使う人の内部、

つまり脳にある。この脳内の言語を生み出すシステムこそ実は心的でありながら実在的な「言語」であり、他方観察される「社会的」言語はある意味そのシステムを人が使って得られる出力、結果であり、それゆえあくまで心的システムがどのようなものであるのかを仮定する証拠となるもので、真の重要なものはそれを生み出すシステム自体にあるというものである。このように社会的な意味での「言語」とは異なったレベルで「言語」を考えて初めて、言語は「言語学者でさえ純粋に言語学用語で定義できない」概念で、「社会的なものであって言語的ではない」という一種のあきらめと、そこから起因する「理論なき社会言語学」というレッテルから解放され、真の意味で社会言語学自体の存在意義を確認できることにつながる。

2. 社会言語学における「言語」の概念

社会言語学の多くのテキストは言語学的には「言語」の定義はできず、どちらかといえば社会的、政治的な定義で、便宜的な名称にすぎないことを説く。したがって、世界にどのくらいの言語があるのかなど統計的な数字はあくまで目安にすぎず、また言語間や方言間の優位さなどは単なる幻想ということである。この議論の根拠としてはいわゆる言語の連続性／非連続性の問題や、しばしば言語の違いの基準とされる相互理解度の程度といった判断が客観的なものではなく、明確に定義できない恣意的なものであることがあげられる。ラテン語から派生したロマンス語圏の言語連続やスカンディナヴィア諸国の言語、フランス、オランダ、ベルギー、オーストリア、スイス、国境近辺の多言語状況など、歴史的理由を背景とした言語連続の例からニューギニア、中国などの言語事情がオーソドックスな例としてしばしば紹介されるが、いずれにせよどの地域を取り上げても事情は似たり寄ったりで、言語と方言の問題はそもそも問のたて方に無理のある問題であるというのが結論になり、これにはまず誰も意義を挟む余地はない。この非連続と連続性の問題について Trudgill は、多言語状況や変異形を社会言語学で扱う際「言語的そして社会的な現象を一つ一つ別の実在物に分割することが、一体、現実は何らかの根拠があるのか、それとも単に便宜上の作りごとにすぎないものなのか」、という難しい問題に直面すると述べ、次のように続けている。

It is as well to point out that this is a problem since terms like 'cockney', 'Brooklynese', 'Yorkshire accent', 'Black dialect' are frequently used as if they were self-evident, self-contained discrete varieties with well-defined, obvious characteristics. It is often convenient to talk as if this were the case, but it should always be borne in mind that the true picture may very well be considerably more complex than this. (1994: 4-5)

様々な言語や方言に「名称」をつけることは、それが社会的、政治的、文化的などの理由からにせよ、その事実、行為自体はある意味で非常に「言語学的」である。それはソシュールが記号学としてのことばの持つ特性としてあげた「記号の差異化」機能である。ある言語グループで外界のモノや現象が主として単語として記号化されるということはそのグループとしてそのモノや現象を「範疇化」し、それに属さないモノや現象との差異化を計ったということの意味する。つまり、互いの了解として‘cockney’, ‘Brooklynese’, ‘Yorkshire accent’, ‘Black dialect’ という名称を受け入れるということは、「ことば」を差異化し細分化したことを意味する。

ソシュールが特に強調したのは、記号が記号として成立するのは互いに異なり、対立するという特性をもつこと、つまり個別の言葉（単語）がそれ自体で自立的に記号として存在するのではなく互いの関係の網の中で体系としてのみ成り立つという点である。従って、‘cockney’, ‘Brooklynese’, ‘Yorkshire accent’, ‘Black dialect’ などといった場合、それ自体を定義すること自体は重要でないばかりか、実際には不可能である。例えば、‘cockney’ という語が実際に使われるすべての文脈の意味を網羅することは不可能である。先に言語や方言は「言語学的に定義できない」といったが、これは実は記号としての言葉一般の特性である。実際に‘cockney’, ‘Brooklynese’, ‘Yorkshire accent’, ‘Black dialect’ などといった場合、それぞれの言語名称は使われる地理的位置や使用者の人種、社会的地位などさまざまな「意味」の複合であり、厳密に記述しようとすればするほど混乱が起きるということは、少し考えればわかることである。したがって現実に社会言語学等で言語名称を自体が重要視される研究分野では、そのような名称が社会でどのような「差異」に基づいて認知されているのか、またそのような名称がどのように用いられ、どのような問題を含むのか、といった角度に焦点を当てることしかできないことになる。社会的には特定の表現を用いること、例えば誰かの話し方を‘cockney’, ‘Brooklynese’, ‘Yorkshire accent’, ‘Black dialect’ などと呼ぶのは必ずしも言語的な特徴を指していない場合もあり、単に慣用、ステレオタイプ、規範、差別等と呼ばれるさまざまな社会的な圧力によることも多々あるからである。特に近年の東ヨーロッパなどのめまぐるしい政治的変動による国家や国境線の変更にもなると、同じ言語でも異なった名称になることもあったり、民族や文化、宗教的な理由で言語自体は同じなのに言語名称の変更が加えられたり、また言語上分裂したりと「言語」がいかにか政治的、文化的なものであるという事実が如実に現れている。また名称の変更が何故必要なのか、呼び方が変わることで一体何が変わるのかなど、政治、文化的な枠組みで言語の名称がどのような役割りを果たすのかなどの理解という点では、社会言語学も多に重要な役割りを担っているといえる。ただこのような視点は「言語自体」の解明にはたす役割りという点では、ほとんど重要ではない。重要なのは、このような事実にも関わらず、これらの語の使用者はそれぞれの脳に別々の語として記憶し、適当な文脈で自由に取り出して

使用できるということである。脳での記憶は脳神経にかかわる物理的な情報として貯蔵されていると考えられるが、自然科学としてこの事実を説明できる仮説の構築と経験的検証によって、派生的に具体的な場での使用能力が説明される必要がある。

3. I-言語と E-言語

「言語」といった場合言語学の歴史から見ても二つの大きな見方がある。一つは言語を使うヒトの外に実在するものであるという見方で、もう一つは言語話者の脳に内在する「言語能力」こそが「言語」で、ヒトによって発せられた現象としての「言語」はその断片的、偶発的な表れであるとする見方である。Chomsky (1986) などではこの二つの見方について、それぞれの立場で意味する「言語」を「I-言語」と「E-言語」という専門用語で区別する。“I”はこの場合“Intensional”, “Internalized”などの意味で用いられるのに対して“E”は“External”（「外在的」）, “Extensional”（「外延的」）などからの頭文字をとったものである。「外在的」であるというのは、この場合言語が心／脳の外、つまり「社会」に存在するという見方で、このような言語観では言語は発話された文の集合であると定義されるので、この意味で「外延的」と言われる。

言語が社会に存在すると考えそれを研究対象とする場合、つまり「言語」を E-言語と見なす場合に生じる問題は Chomsky が機会あるごとにとりあげる話題である。このような言語を社会的、もしくはそれを使う個人の脳の外に求める態度は、いわゆる構造主義言語学などに典型的に見られる見解で、例えばフィジカリズムと呼ばれる Bloomfield の言語の定義は、「ある共同体で話される発話の総体」というものである。このような見方を引き継いだ新ブルームフィールド学派でも前提とされた言語観は「テキストがそれ自身の構造を合図する」(Text signals its own structure.) という言葉に集約されるように極度の「反メンタリズム」であった。したがって彼らが行った言語分析は、物理的現象としての空気振動にすべての情報が含まれていなければならないという仮定から、音声分析から音素、形態素へといわゆるボトムアップの順で「レベルの分離」という原則を厳守しながら進むことになった。この言語観と分析の限界については、Chomsky (1964) をはじめとする生成文法理論から痛烈な批判を浴びたことは周知の事実である。

後で詳しくみるように生成文法理論は言語学の対象を母語話者の持つ心的／生物学的言語機能や言語能力、つまり I-言語と考える。生成文法理論が構造言語学の研究対象であった外的な事象としての言語の体系から母語話者の持つ言語能力へと移行したことで、言語運用に関わる現象はもっぱら言語研究の対象外とされた。アメリカで“sociolinguistics”の学会が創立され大学で講座が開講されるようになったのは生成文法理論が一世を風靡し始めた 1960 年代から

で、社会言語学の台頭はある意味で社会でどのように言語が使われているのかという言語の使用状況をダイナミックに理解しない限り「言語とは何か」を語ることはできないという心的言語能力の解明という理論言語学に対するアンチテーゼでもあった。

言語学がヒトは何故言語を習得し、使用できるのかという問いに答えることを目標とするには「言語」の定義を明確にする必要がある。子どもが言語を習得するにはいわゆる言語資料として言語環境が必要であるが、そこで経験的に「聞いた」言語資料と子どもが実際に使う（または、使える）言語との間には直接的な因果関係は証明できない。経験的に覚えて獲得したと考えられないような言語現象はこの間様々な分野で報告されている。経験が必要なのは *I*-言語能力の発達を助けるためであり、実際に使用される言語 (*E*-言語) はこのような言語能力の出力であるからである。特定の文や表現を特定の文脈で使う場合、実際には様々な「知識」がかかわっている。発達心理学等で子どもの言語習得過程で必要とされる様々な環境条件が研究されているが、実際には *I*-言語、つまり言語にのみ関わる心的器官がどのようなものであるのかわからない限り、その関連について実質的な議論はできないことになる。社会的な状況に応じた使い方についても同じことが言える。実際、社会言語学や心理言語学等で言語の変異形や多様性、また異なった社会条件での言語の使い分けが説明されるが、誰もが受ける印象は「現実はずっと複雑なのに」ということにつきる。つまり、逆に言えばこのような感想が持てるということ自体、意識には顕在化していない極めて豊富で、精緻な判断や区別が言語能力としてあることを示しているといえる。

社会言語学との関連で言えば、先ほど触れた「言語名称」の問題は *I*-言語、*E*-言語についてはどのように考えることができるであろうか。多様な言語変種の中で近年クレオール言語もよく取り上げられる。ピジンがクレオールに成長する際、ピジンは特定の目的のために使われる一時的な言語で、それゆえ使用者によってまちまちの使い方がなされるが、クレオールになる際習得の資料となるピジンに含まれていなかったさまざまな文法事項が新たに獲得されるが、これは何故可能なのか、などが言語学的な視点からは特に注目される。クレオール化が始まるとその過程でクレオール語連続体という現象が見られることが報告されている。クレオール化された後、いろいろな変種が上層語に最も近い「高層語」(acrolect) から「中層語」(mesolect), 「低層語」(basilect) へと続く。例えば、ガイアナ・クレオール連続体 (Guyanese Creole continuum) と呼ばれる変種の連鎖を例にとると、次のような変異形が認められる (Romaine 1994: 171)。これは時間的な変化ではなく、通常複数の変異形が同時に存在し、地理的、社会的要因などで使い分けられている。

は一貫性を欠いて「英語」などと呼んでいるものの変種の一つを使用している話者である。(Chomsky 1987: 67-8)

4. 認知革命,あるいは生物言語学

Chomsky の提案する言語理論がしばしば「認知革命」と呼ばれるように、彼は言語理論は知識や信条、理解などに関する脳の下位システムとしての「認知システム」の一部であると見なしている。これを彼はしばしば「心的器官」と呼ぶ。心的器官が重要なのは、行動は観察しうる現象であるが、それは心／脳にそなわった認知システムによって発現されているが故に起こる現象で、それ故真の説明対象は社会などの行動そのものではなくそれを引き起こす心的認知システムであると考えられるからである。「行動は証拠であるにすぎず、研究対象ではない。研究の対象は心の性質である」というわけである⁴⁾。

このような心的実在としての言語能力ことが研究に値する「言語」であるという主張は、さまざまな反論を呼んできたこともあり、Chomsky の議論の多くは「自然科学としての言語学」の正統性を科学史のなかで位置づけることに紙面や時間がさかれてきた。その主たる主張は、デカルトの心身問題がニュートンによって乗り越えられたが、それは心的面での理論を破棄するのではなく逆に機械論的な身体面での力学を破棄することで達成されたものであるということに注目すべきである、というものである。つまり、ニュートン力学以降の自然科学では、さまざまな力や波、質量のない粒子などの直接観察できない概念をも、物理的現象の首尾一貫した説明をする上で必要なら理論に持ち込むことで、多大な成果をおさめているという認識である。したがって、認知システムという心的で間接的にしか仮定できないシステムの特性や原理をも言語現象を説明するのに必要であれば物理的現象ではないという理由で排除することは適当ではなく、逆にこの態度こそ真の意味で自然科学的態度といえるということである。⁵⁾

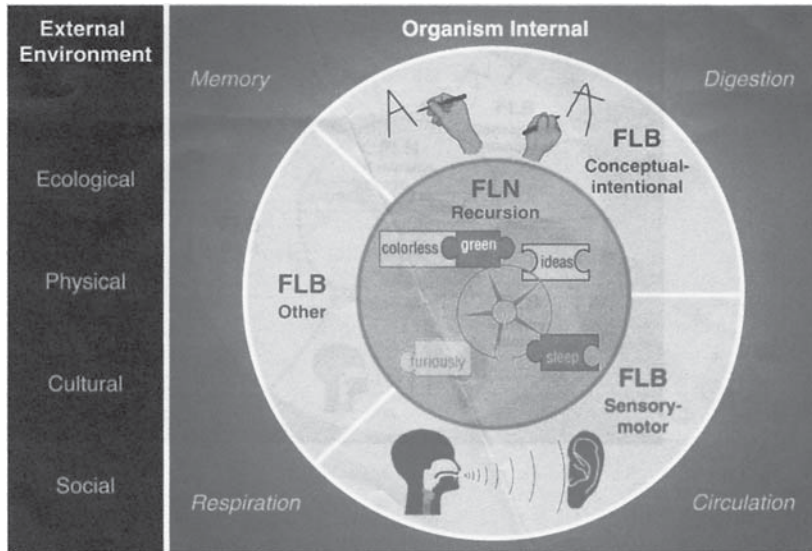
「*I*-言語」とは脳神経に物理的メカニズムとして実在する、内在化された特定言語のシステムである。この「*I*-言語」が具体的にどのようなものであるのかを説明した理論がその言語の「文法」と呼ばれる。物理的実在物としての心的システムは、抽象的で直接観察できないという意味で心的、抽象的な「仮想物」であるが、現実の世界に「言語」として実現されるので、文法の妥当性は検証可能となる。この意味で「*I*-言語」は内在化された規則と制約からなるシステムで、自然科学的な研究対象と認定される。このようなシステムは身体における消化器系や循環器系等と同じく、物理的に独立している必要はない。したがって、具体的に心／脳で形成される「*I*-言語」としての言語システムは一種の演算システムで、心的に形成された表示を形成し、可能な変更を施すものとみなせる。したがって、「*I*-言語」はその独自の構造的、機能的特性や、生まれてからの獲得過程（成長過程）、進化過程での種としての獲得問題、他の

下位認知システムとの関連などの説明が研究課題となる。

Chomskyを中心に1970年代後半から展開されているいわゆる「生物言語学」(biolinguistics)あるいは「I-言語学」(I-linguistics)⁶⁾とよばれる理論は「極小モデル」とも呼ばれ、次のような仮説にもとづいた言語研究に取り組んできた。まず、ヒトには生得的に「言語」を習得する能力が備わっている。この能力を「言語機能」(language faculty)と呼ぶ。この言語機能の初期状態、つまり第一次言語資料の影響を受けない状態を「普遍文法」(UG)と呼び、遺伝資質的に与えられたもので、この機能が経験を通して一般に「母語」と呼ばれる「言語」となる。このようにそれぞれの個人の獲得した「言語」は言語機能の最終的な安定した状態のことで、言語能力、または「I-言語」と呼ばれる。このような言語機能の初期状態や「成長」後の安定状態は演算認知システムと運用システムから成る。極小理論プログラムの仮説から、この演算認知システムはそれまでの生成文法理論と異なり極度に抽象化、単純化されたシステムで、リーカーシブ、Mergeによる演算機構だけを備えたものであるが、運用システムによってアクセスできるアウトプットであることが条件として求められるだけである。この運用システムがアクセスできる認知システムのアウトプットはインターフェースとよばれ、演算システムの満たすべき条件は「読み取り可能性条件」(legibility condition)と呼ばれる。このようなI-言語学の研究領域に関わる言語機能の内的／外的要因はHauser, Chomsky, Fitch (2002) (以下HCF)では次ページ(2)のように図式化されて説明されている。

外側の二つの四角はそれぞれ個人の身体と個人を取り巻く外的条件、つまり社会、自然環境をあらわす。身体内部には、器官の一つとして言語機能があり、中核のFLNがこれにあたる。FLNは“the faculty of language in the narrow sense”の略で、狭義の言語機能をあらわし、その外側の円はFLB、つまり“the faculty of language in the broad sense”で広義の言語機能を表す。FLNは再起機能を備えた形式的演算システムと「語彙」からなり、例えば図中では有名な“Colorless green ideas sleep furiously.”を例に語彙項目から選ばれた、“colorless”と“green”が結合され、つづいてそれに“ideas”，さらに“sleep”，“furiously”が合体していく様子が表されている。このようにFLNは有限の要素から無限の記号列表現を生み出す「再起」という特性を備えたシステムであるが、このようなシステムは言語に限らず数学等の自然数などにも見られる特性である。つまり言語機能だけに見られる特性ではなく、そもそも発生的にはもともと言語の為に獲得された能力でないと考えられている。逆に言語機能として独自の器官となったのは、このような演算システムがその外側の円の中に埋め込まれ、FLNがその一部となることで結果的に外的条件を包括した内容に変化し、その結果FLBというユニークな能力がヒトに備わった、というのがHCFをはじめとする生物言語学の主張である。このようなことからHCFはもしFLNの基本機能が異なった運用システムに埋め込まれていたなら、別の種独自の能力となったであろうし、ヒトのFLBに埋め込まれたFLNをそのまま他の動物

(2)



に移したとしても、運用システムを稼働できないのでその動物はヒトのような言語を持つことはないであろうと主張している。この意味で言語機能は種独自の能力であるといえる。

FLBがその内部のFLNに加えて備える運用システムとしては少なくとも「概念／意図」と「感覚／運動」に関するものが含まれる。図中には調音器官と聴覚器官、また文字の読み書きに関わるシステムの例が描かれている。さらにFLBの外側には記憶をはじめ身体の様々な器官系が置かれている。FLBにある“other”との違いは、FLBがFLNが運用されるための必要十分条件になっているのに対し、その外側に属するものは言語使用にとって必要ではあるが十分条件にはならない要因である点にある⁷⁾。もちろんここでFLBに含まれていないが言語使用にあたっては基本システムを制約する身体内部の要因もある。たとえば、肺機能やワーキングメモリーは文の長さや構文の複雑さに関係するし、調音器官の進化過程もFLNの形成に関係ないとは言い切れない。しかしながらHCFはFLNの進化についてはFLB外の要因について考慮しなくとも可能であると断定している。その理由は、FLBについては他の哺乳類と共通している部分が多いにも関わらず、動物のコミュニケーションや他の種独自の能力等にFLNに相当する能力があるとは考えられないからである。したがって、他の動物との比較研究としては、コミュニケーションに限らず、FLNに相当する能力があるかの調査、研究も重要となる。

5. 言語の変異形，言語変化と社会言語学

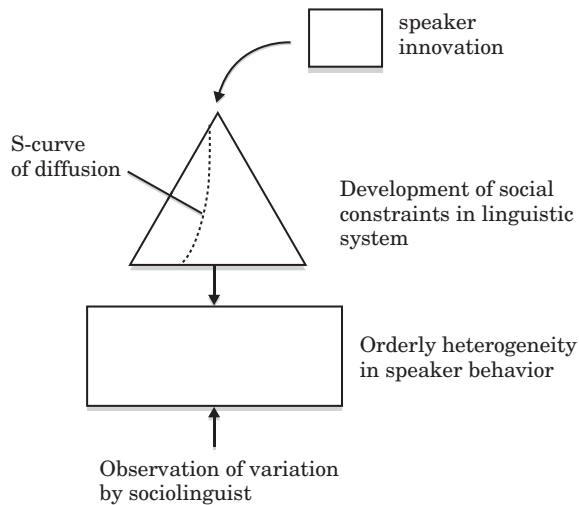
それぞれの国家や地域を単位としてそこでどのような言語が用いられているかといった視点から、それぞれの地域社会の構成員がどのように言語を使っているかといった現実の言語使用状況に目を向けると一気に言語の多様性の問題に直面することになる。多様性の問題は政治的レベル、例えば公用語や国語問題から標準語と方言問題など特に行政や教育政策面に関わる問題であり、これも重要な言語に関する社会的課題であるが、同時に言語上の多様性が生じる原因、要因の究明は言語変化と関連して言語学上の重要な課題である。社会言語学で言語変化を扱う場合しばしば「言語内部の要因」と「社会的要因」を区別して説明される⁸⁾。しかしたいの場合言語変化についての社会言語学的な説明は、ことばが社会という実際の場で使われる場合には、さまざまな社会要因によって変異形が使われ、このような社会的要因が言語に内在する要因との相互作用で言語変化を引き起こすとして、実際の社会で進行中の変化を捉え、変化と社会的要因の関わりを明らかにし、言語変化のメカニズムの一因を社会のなかに求めようとする。具体的には言葉の変化がいつ、どこで起こり、どのように社会に拡散していくのか、またその変化の要因としてどのような理由があるのかを、特に民族や階級、年齢、性、価値観、政策、などの関連から特定することである。言語変化が具体的な言語使用から起こることは確かであるが、ただその原因とされる民族や階級、年齢、性、価値観、などはあくまで言語学から見れば「便宜的概念」であって、言語使用のレベルでの説明としてはわかりやすくても、システムとしての言語変化の要因としてはあくまで間接的でしかない。この相関関係の実質的な理解のためには、後で触れるように、重要なのは階級や年齢といった社会的要因要因が使用者の心的表示としてどのように脳内の言語に関わる表示に影響を与えるかという視点を持つことである。

社会言語学で社会的グループが使う言語や言語変種を問題にする場合テキストで扱われる話題、調査結果等はかなりの部分共通している。最も顕著なのは発音を基準としたもので、ついで単語の意味の違い、文法的形態素の違いがある。英語の発音に関しては、LabovによるMartha's Vineyard島の母音変異やニューヨーク市のデパートに置ける同一音節内の母音の後の/r/に関する調査、Trudgillによる [ŋ] の使用、語頭の [h] の脱落、等がありいずれも社会階級や年齢、性別、文体との相関を調べたものである。文法的接辞に関しては動詞の三人称単数現在形をあらわす接辞 /-s/ の脱落現象、後でくわしくみるが発音と形態素の両方に関わるものとして語尾の [t, d] の脱落現象等がある。このような調査や分析の目的の一つには言葉の使い分けや変化が社会のどのような条件、要因と相関関係にあり、どのような機能を果たしているかという機能的な面に焦点を当てた点にある。

言語の具体的な使用状況を考えた場合、言語は「運動を伴う行動」であるので、現実には無

限の多様性を生じるが、もちろん言語の現実的な要件としては「通じる」ということが必要なので、ある程度抽象化すれば使用者の間で多くの共通点が見いだされる。言語は通じるために同じであることが望ましいのに、言語は面白いことに絶えず変化する。言語変化は通常具体的に言語を使用する個人から始まる。この個人レベルからはじまる言語変化を社会言語学の視点から、Milroy and Milroy (1997) は次のような図で説明している⁹⁾。

(3)



ある言語の話者、または話者達は、その時々々の流行等によって一定の価値観や行動様式を持ち、社会の中での規範に従ったりまたはそれに逆らったりしながら“innovation”とよばれる新しい変異形を使うようになる。これがある時には社会的要因により意識的に行われることもあれば無意識的なこともあるが、別の人々に受け入れられさまざまな速度でより大きなグループへと拡散していく。一時的な流行で終わる場合もあるが次第に社会に受け入れられていく場合も少なくない。この拡散の様式は通常は最初と最後がゆっくりと進み、中程では“S”カーブを描いて広がっていくと考えられている。変化が完全に社会全体に浸透する場合もあるが、通常は変異形として古い形と新しい形が併用される場合が多く、この状態では変異形の使い分けに関して年齢や性別、状況など社会的な「条件」が関係し、同時に社会的価値判断が伴うことが多い。このような価値判断は時代とともに変化し、更なる変化をもたらす。時には社会的な圧力や教育を通して、変化を阻止しようとする動きもあり得る。極端な場合には、言語や方言自体を放棄し、別の言語の方言に乗り換えるということも起こる。いずれにせよ社会言語学者といえはこのような言語変化と社会の関わりを観察し、記述し、ヒトの社会の特性を明らかにする立場にあることも図中で示されている。

このような言語変化の捉え方で注意しなければならないのは、図中の“speaker innovation”以後社会で起こる新しい変化の受容や拒否、拡散にかかわる現象は何も言語に限らず、基本的には一般的な社会現象と何ら変わらないという点である。そもそも社会、文化などの現象とは記号、意味体系という抽象的なレベルでの「文法」や「構造」なので、言語と変わらないのは当然と言えば当然のことである。したがって、言語固有の問題として問題にすべきことは図中最初の四角の中身である。つまり、そもそも“speaker innovation”とは具体的にどのようなことが起こっているのかということである。その手がかりは図中の“orderly heterogeneity”で示されている現象にある¹⁰⁾。

ここで特に言語学からみて重要なのは、言語の変異形と社会的な要因とがある種の規範、習慣として社会に根付いた場合、それがいわゆる見かけ上のことで、実は変異形の使用が言語能力に内在したものであると考えざるを得ない場合があることである。図中の“Orderly heterogeneity”という説明に関わる点である。これは範疇的でない、いわゆる社会言語学的変異もまったくランダムに使われているわけではなく、一定のパターンが見出される現象であることを指す。ランダムでないということは、どのような変異形があり、何故（他の形ではなく）そのような変異形が生じているのか、なぜ一定のパターンを持つのか、などの説明が必要であることを意味する。社会的要因が使用上の特定のパターンを生じる可能性を全く否定はできないものの、どの個人や特定のコミュニティでも類似する使用パターンが見られるとすると、やはりこれは言語能力に起因するのではないかと思われる。実際、言語変種の問題の中には一定の使用確率がかなり詳しく調査されているものがあり、中にはそれが文法から演繹的に予想がつくことが示されている。このような観点からの研究で最も頻繁に話題になるのが英語のいわゆる歯茎閉鎖音 *-t/d* 脱落現象である。

6. *-t/d* 脱落現象と言語能力

-t/d 脱落現象が起こる条件にはいくつかある。まず脱落の対象となるのは語末の子音連続の最終子音 *-t/d* であること。脱落が起こる環境は形態的特徴や前後の分節素の種類に従って細分化される。この *-t/d* 脱落現象で注目される点は脱落が起こる環境が義務的／随意的といった二項選択的な結果をもたらす規則適用の仕方ではなく、ある個人または特定のコミュニティですべての環境において同時に生じることがあり、その生起が確率的に一定の傾向を持つという点である。Guy (1994) では *-t/d* 脱落の環境と頻度との関係について次のような結果が報告されている。

(4) a. External phonological conditioning: following context effect

	N	% Deleted
__## C	422	48.6%
__## V	293	15.0%
__##	180	27.8%

b. Internal phonological conditioning: preceding segment effect

obstruent ____	449	39.2%
nasal ____	248	35.1%
liquid ____	198	18.2%

c. Morphological conditioning: morphological class

	N	% Deleted	ex.
Monomorphemes	658	38.1%	<i>mist, pact, west</i>
Irregular Past	56	33.9%	<i>left, told, lost</i>
Regular Past	181	16.0%	<i>missed, packed, tolled</i>

(4) にあるように *-t/d* 脱落現象は大きく三種類の条件に左右される。(a) は後続の語の有無および最初の方節素にかかわる条件, (b) は直前の子音の種類, つまりコードにおける子音の音列条件, (c) は形態的構造に関する条件である。

このような特定の条件で起こる音韻変化は生成音韻論と呼ばれる理論では従来音韻規則によって説明されてきた。いわゆる SPE タイプ¹¹⁾の規則による形式文法では特定の条件を満たす音列としての入力形は一連の規則の適用によって唯一の出力が派生される。したがって方言や歴史的音変化等は原則同じ基底形から規則の適用の仕方(順序や新しい規則の追加)などによって説明され, その場合全体的な文法体系が異なることになる。同一文法で変異形が生じるのは適用が「随意」と指定される場合のみである。ある随意規則が適用条件を満たす場合, 結果的に複数の出力が派生される。このような変異形は伝統的には「自由変異」(free variation)と呼ばれてきた。変異が「自由」というのは規則的でないという意味ではなく変異が生じる場合を文法で規則的に定めることができないという意味である。しかしながら, 文法以外の言語使用に関わる条件によって結果はまったく「自由」ではなく, 特定の制約に従っているとされる場合もある。このような例としては社会言語学などで話題とされる, 年齢や性差, 職業, 場面などによる変異形の選択の場合である。しかし通常社会的な条件とされる変異形は社会的, 文化的な制約や個人的な心理や好みによる選択による「自由度の制約」であり, あくまで変異形自体が生み出されるのは「文法」による。

いずれにせよこのように規則による形式的説明は出力が「範疇的」であるので, いくつかの変異形がある場合それらを同時に出力として派生させることはできない。しかしながら, かな

り早い時期から地域方言や社会方言、またはスタイルの違い等による変異体を SPE タイプの規則で説明することによって、ある種の変異形が言語能力、文法の構造的な特性から生じることが示そうとする試みがなされていた。同じ文法で複数の変異形を派生できる規則は範疇的な規則と区別して「変異規則」(variable rules) と呼ばれる。*-t/d* 脱落を記述する変異規則は次のように表される。

(5) [t, d] → <∅> / C _____ (with variable constraints)

(5) は - 同じ *t/d* 消去規則を環境条件によって選ばれる確率を示すことで、どの変異形がどのような確率で使われるかを示したものであるが、確率を規則の形式内に組み込むことができないので、言語能力の記述としては不十分である。このような “orderly heterogeneity” を形式的な文法の中で説明しようとしたのが Guy による語彙変異音韻論である。

Guy (1991a, b) は Labov 等による音韻規則に変異率を組み込んだ「変異規則」を Kiparsky などによって展開された語彙音韻論の枠組みによって再解釈を試み、この理論は「変異語彙音韻論」と呼ばれている。具体的な分析にはいくつか問題もあり、その妥当性については必ずしも説得力があるとは言い難いが、変異形の使用がいわゆる範疇的な規則からなる文法で説明できることを示すことで、ある種の変異形は言語能力／文法から生じる可能性を具体的な仮説として提示した点で非常に有意義な試みであるといえる。

語彙音韻論の特徴は形態的な特徴をレベルと結びつけ、レベルによって適用される音韻規則や適用方法を区別した点である。まず大きく語彙レベルとポスト語彙レベルに大別される。語彙レベルは語彙を最大範囲としてその内部構造により規則が適用されるのに対して、ポスト語彙レベルでは句を適用範囲とし、規則は語の内部構造を考慮することはない。ポスト語彙レベルで適用される規則はいわゆる「自由変異音声規則」(low-level allophonic rules) である。これに対して語彙レベルで適用される規則は「構造保持規則」で、基底で示差的な特徴だけで音韻上の変化が起こることになる。これで、伝統的に区別されてきたが形式的には区別がむずかかった音韻／音声規則の違いが明確になった。従って、(4a) の例等はポスト語彙レベルで生じる変異形で基本的に他の条件とは異なることがわかる。

語彙レベルは形態規則の種類によっていくつかのレベルに分けられる。その数は理論によって多少異なるが、いずれにせよそれぞれのレベルで形態的構造が形成され、それに対して適用可能な音韻規則が適用される。このように語彙音韻論は形態論と音韻論の関係を互いの規則群を交互に適用するという捉え方で形態音韻論を形成すると考える。(4c) の脱落率は形態的な特徴による音韻規則の適用率でもあるので、この意味で語彙音韻論的な分析が有効である。

語彙音韻論では過去形は通常異なったレベルで生成される。いわゆる不規則動詞の過去形は

形態規則によってレベル1で生成されるのに対して規則動詞の過去形はレベル2で形態規則によって生成される。単独の形態素で語を形成する場合を含め、形態的に異なる3種類の語の派生を示せば次のようになる (Guy 1994)。

(6)	Monomorph	Irregular Past	Regular Past
Example:	<i>west</i>	<i>lost</i>	<i>messed</i>
Underlying representation	[west]	[luwz]+Past	[mes]+Past
Lexical Level 1	[west]	[luwz]+ed]	[mes]+Past
Lexical Level 2	[west]	[lohst]	[mes]+ed]
Postlexical level	[west]	[lohst]	[mest]

問題の *-t/d* 脱落に関する語彙規則は語末で歯茎閉鎖音を消去する規則であるが、各レベルで条件を満たせば適用されるので、単一形態素についてはこの規則の適用機会は三度あり、不規則過去形は二度、規則動詞については一度の機会を持つことになる。Guy の仮説は三種類の形態的特徴の違いと *-t/d* 脱落の確率との相関はこの規則適用の機会に起因するというものである。具体的には1回の適用について歯茎閉鎖音が残る確率は0.5で、規則適用機会が1回あるごとに50%の確率で消去、または残る可能性がある。従って、2回の適用機会では25%に、3回の機会ですべての12.5% (つまり、0.5の3乗) が残ることになる。これをまとめれば、 P_r を歯茎閉鎖音の残る確率とすると、この値は $1-P_0$ (P_0 は規則の適用確率) ということになる。一般に歯茎閉鎖音消去規則の適用機会が n 回あれば、消去されないで残る確率は P_r^n ということになる。従って、このモデルは「指数モデル」(exponential model) と呼ばれ、*-t/d* 脱落現象に当てはめれば、歯茎音が残る確率は規則動詞の過去形の場合を $R (=P_r)$ とすると、不規則動詞の過去形は R^2 、規則動詞の過去形は R^3 となる。

このモデルは Guy (1994a, b) などでも示されているように、理論上の期待値が実際の実験的結果とかなり一致する。しかしながらこの仮説の欠陥は、語彙音韻論は *I*-言語についての理論、つまり「文法」であって、実際に発話する際の運用モデルではないので、適用回数をもとに頻度を出す方法は妥当とはいえない。アウトプットとしての表層形といった場合もあくまで理論上の原理の一面にすぎないわけであるので、規則が適用されても実質的には構造変化の起こらない「無為適用」の回数をキーと考える提案は説得力に欠けるといえる。しかしながら *-t/d* 脱落が「ベキ」回数の結果と極めて近い数字を示すというのは興味ある指摘である。

このような SPE タイプの規則に基づく説明は必ずしも変化の理由を説明するものではないという批判から、1990年代に機能的説明に重点を置いた最適性理論 (Optimality Theory) が 208 (698)

提案された。OT の特徴は文法がランク付けられた制約からなる点にあり、ランク付けられた制約によってさまざまな入力形が比較され、できるだけ上位の制約に違反しない形が最適格形として選択されるというシステムである。文法は制約のみからなるが、従来の制約の考え方と異なり制約は絶対的なものではなく、出力形は制約に違反しても良いとする点がこのようなシステムを可能にしている。制約は機能的に有標性（“markedness”）に関するものと入力と出力の同一性を要求する対応性（“faithfulness”）に関するものに分けられる。前者は普遍的な言語の特性に関する制約で、後者は個別言語特有の記号としての「対立」を保証する制約である。そしてこの両者のランク付けで、さまざまなレベルで個別の表現が決定されることになる。*-t/d* 脱落現象で言えばもとの語形や過去を表す形態素をそのまま保持しようとする対応性制約と形態素規則や句レベルで派生された音列をできる限り自然にしようとする有標性制約とのランク付けでアウトプットが変わる。OT の制約はすべて普遍文法（言語機能の一部）と考えられるので、個別言語の対応制約のランクによって、ある意味で言語の「個性」が生じることになる。個別言語の名称問題はこの個性の類似性の同定の仕方の問題ともいえ、この意味でも言語自体で決まるものではない。

機能主義は、例えば音韻論で言えば、調音の際のたやすさや聞き取りの際の明確さを盛り込んだ説明こそ説得力を持つ、自然な理論であるとする古くからの立場である。具体的には音韻論で同化や異化現象と呼ばれているものである。しかしながら、このような明確な自然さが従来の形式的文法に十分反映できなかったのはこれらの現象が相矛盾する現象であるからである。OT では制約はすべて絶対的に守らなければならないというわけではなく、システム上違反できるので、このような矛盾の克服が可能になった。聞き手から言えば基底形と表層形の対応が重要になり、話し手から言えば音声学的自然性が優先される。*-t/d* 脱落現象の説明についてもどのような制約が必要かについてもいくつか議論があるが、ここでは音声学的自然性に関わる制約として ONSET, *CxCOD, *CxONS, 対応性制約として MAX(*t/d*), ALIGN の5つを採用して簡単にその原理を示す。ONSET 制約は音節頭子音が必要であるという制約、*CxCOD はコーダの子音連結を認めない制約、*CxONS はオンセットに子音列を認めない制約、また ALIGN は音節境界と形態素境界が一致しなければならないとする制約、MAX(*t/d*) は *-t/d* の消去を禁止する制約である。この制約の順序を *CxONS > ALIGN > *CxCOD > ONSET > MAX(*t/d*) とすると (4a) の環境についてはすべての場合に語末子音 [t] が消去され、ALIGN の制約のランクを下げて *CxONS > ALIGN > *CxCOD > ONSET > MAX(*t/d*) の順序の順序にした場合は子音及びポーズが続く場合には [t] は消去されるが、母音が続く場合には残ることになる。

(7) a. すべての場合に語末の子音が消去

	/kast əgɛn/	*CxONS	ALIGN	*CxCOD	ONSET	MAX(<i>t/d</i>)
1a.	kast] [əgɛn			*!	*	
1b.	kas] [əgɛn				*	*
1c.	kas] [təgɛn		*!			
	/kast mi/					
2a.	kast] [mi			*!		
2b.	kas] [mi					*
2c.	kas] [tmi	*!	*			
	/kast/					
3a.	kast]			*!		
3b.	kas]					*

b. 母音が続く場合のみ残る

	/kast əgɛn/	*CxONS	*CxCOD	ONSET	ALIGN	MAX(<i>t/d</i>)
1a.	kast] [əgɛn		*!	*		
1b.	kas] [əgɛn			*!		*
1c.	kas] [təgɛn				*	
	/kast mi/					
2a.	kast] [mi		*!			
2b.	kas] [mi					*
2c.	kas] [tmi	*!			*	
	/kast/					
3a.	kast]		*!			
3b.	kas]					*

t/d が消去されない場合は入力と出力の対応関係が保証される Faithfulness の制約、この場合は MAX(*t/d*) であるが、これが消去された形を良しとする制約より上位にランクされた場合か、または次の母音のオンセットとなり、この制約が上位にある時である。結局これらの制約の組み合わせから、*t/d* が残る形、あるいは消去された形のどちらが最適性と評価されるかについては、(7) の (a), (b) の場合に加えて、ポーズの前だけに残る場合、子音の前だけで消去が起こる場合、すべて残る場合、がある。逆に、母音の前だけ、またはポーズの前だけで消去が起こることはない。このような3つの条件と消去の可能性については一種の含意関係が成り立つ。つまり、1) ポーズまたは母音の前で消去が起これば子音の前でも消去が起こる。2) もし母音の前で消去が起これば、ポーズの前では消去が起こる場合もあれば起こらないことも

ある。3) もしポーズの前で消去が起これば、(2)と同じように母音の前では消去が起こる場合もあれば起こらないこともある、の各場合である。ここで重要なことは、それぞれの場合を生み出す制約の順序が一つの文法と考えられるので、それぞれのパターンは複数の文法の組み合わせということになり、結局この OT による説明は個人または共同体は同時に複数の文法をもつという仮説が含まれることになる。この組み合わせの可能性によって、特定の環境でどの程度脱落が起こるのかの確率が算出できる。

OT では制約の順序が変われば異なった文法ということになるので、(4) の場合のような変異形を個人が使う場合は同時に個人が同時に複数の文法を持つということになる。しかしながらいわゆる個人バイリンガルなどの場合には複数文法仮説は考えるが、単なるスタイル等の自由変異的な変異形の使用状況について同じように考えられるかは疑問である。さらに複数の文法を持つといった場合、-t/d 問題で基本的に問題視される "orderly heterogeneity" の問題について、一定の確率的な変異形選択が文法選択の確率といったいわば「傾向」としか捉えられないことになり、この点で不満が残る。

OT 理論の自由変異問題は OT の持つ原理的問題点として透明度問題とならんで早くから指摘されてきた。それは OT 文法が基本的に入力—出力の写像原理で成り立っているからである。つまり、特定の入力に対して最も適切な（ランク付けされた制約に対して）出力を決定するのが OT の文法であるので、変異形、つまり複数の出力が得られることはないからである。逆に言えば表層形として異なった二つの形があればこれらは何らかの制約で異なる評価（制約違反のマーク）を受けることを意味する。このような状況で、現実の「自由変異」はどのような方法で説明がなされるのか？規則からなる文法であればある規則の適用を「随意」とすることで自由変異としての派生形を得ることができる。ただし、形式的規則によるのでその理由については十分な説明にはならないという欠陥がある。OT でこの「随意適用」にあたる仕組みを取り入れることは可能であろうか？

いわゆる古典的 OT と呼ばれる枠組みでは個別文法は Con にすべて順序付けられた制約の集合であったが、最近の修正版では制約はある種の部分的な順序付けがなされるということに変わってきている。部分的な順序付けでは互いに衝突する制約は同等でどちらが優位という関係がないことも認められ、このような場合にいわゆる「変異形」が生じることになる。このような仮説は Kiparsky (1994) でも提案されている。例えば制約が部分的に順序付けられたある言語の文法 G_p が仮に $\{C1 \succ \{C2 \ C3\}\}$ とすると、すべての制約が順序付けられた G_p 中の文法 G_i として $\{C1 \succ C2 \succ C3\}$ または $\{C1 \succ C3 \succ C2\}$ が選択され、それぞれ特定のインプットは最適なアウトプットを一つ決定することになる。このようなシステムでは C2, C3 が選ばれる確率は 50% になるので、バリエーションだけでなくそれぞれの生起確率までも予測できる。そのうえ OT の内包する特性から、制約のランクでどのような理由でバリエーションが生じる

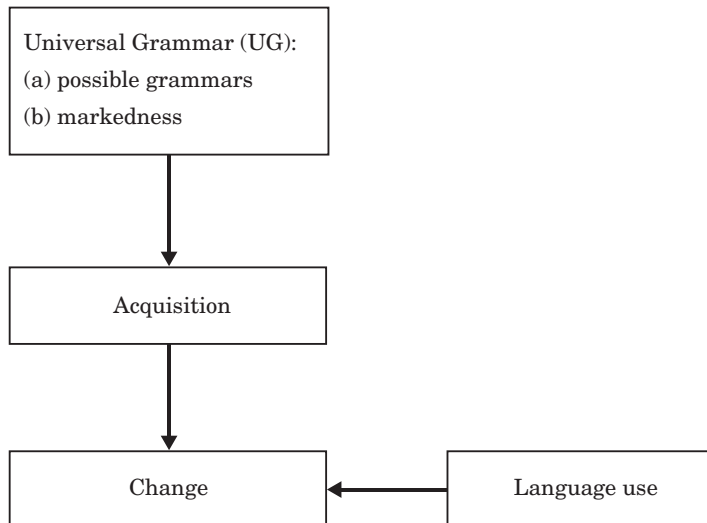
のかを説明できる利点がある。

このように *-t/d* 脱落など、特に社会的な要因による変異形の使用ではなく、自由変異的に起こる変異形がある。そして、特にその頻度に関して一定の傾向がある場合などは文法でどのように説明できるか、つまり *I*-言語の解明に深く関わる。そしてこの点は文法理論の妥当性の判断にもかかわる問題である。さらに、社会言語学などで扱われるスタイルをはじめとするさまざまな変異形も、直接的にどのような認知システムがどのように関わっているのかを考える上で、このような問題の解明は重要な意味を持つ。

7. 言語変化と普遍文法の役割

言語変化が起こる場合は大きく二つ考えられる。一つは今述べたような言語習得時に経験する言語資料の違いから、特に前世代の話者が持つ言語能力がそのまま受け継がれない場合¹²⁾で、もう一つのケースは、いわゆる言語習得上言語機能が「安定状態」になった後、運用上や社会的な理由で発音や語彙などの周辺的な部分についてのみ変化が起こる場合である。前者の場合は、パラメータ上の設定から、制約の変化、または最適性理論では制約の順序付けの変化としてとらえられる。具体的なことは理論によって異なるが、*I*-言語を言語と捉えた場合、言語変化は言語機能や言語能力の基本的な仕組みに左右され、変化しうる部分としにくい部分をはじめ、変化を統率するフィルターとして言語機能や言語能力がはたらく。これを Kiparsky (2008) は次のような図で説明している。

(8)



この図での“→”は「説明する」または「制限する」の意味に使われている。つまり言語変化を制限する要素は、結果的に構造、体系的变化をもたらす生得的言語機能に基づく言語能力の経験的「不完全習得」と、言語使用にかかわる機能上の要因とがあることを示している。したがって、言語の共時的な体系、文法が無制約な言語変化を阻止し、可能な変化を規定することになる。このような仮説では逆に歴史的言語変化が共時的な文法の妥当性の検証にも関わることになる。

言語は先にあげたような言語使用上の理由から、できるだけ効率のいい方向へ変化しようとする力があると考えられるが、その力は生理学的な理由や認知上の理由、さらには脳神経的な理由から社会的な理由までさまざまなレベルから生じる。しかしながら、歴史的な変化を見れば変化の仕方にはある種の制約が働いていることが見受けられる。これはいわゆる言語類型論が成り立つことから言えることである。類型論での制約は普遍的な特徴から、単なる「傾向」までさまざまである。「傾向」はかなり偶然性に左右されつつ、主として(8)で言えば有標性(markedness)にしたがって起こる変化である。一方歴史的変化の中には有標性から言えば不自然な変化も起こっている。このような特徴を持つ変化は、いかに「自然」であっても変化の許容範囲を規定する言語の普遍性、つまり言語機能の規定する制約によって阻止されると考えられる。言語に関わる社会的な要因は有標性、自然性の観点からいってもあまりにも恣意的で、このような変化を直接、またはそれに近い形で説明する体系にはどうしてもそぐわないと言わざるを得ない。したがってまずは社会的な要因をもう少し言語学的な構造や体系に言及できる基本概念に置き換えると言うことをしない限り、社会言語学と言語学との溝は埋まらないと言える。

言語変化の「不自然さ」は言語学的には今述べたような言語機能の制約によると考えられるが、機能的には言語の記号としての性格から起こる面もある。記号レベルの判断はある意味で「一方的」である。記号の場合「差異」が体系上重要であるが、記号上、つまり「脳が下す判断」はある意味で「独断的」である。これは音韻論でしばしば問題になる「音声学的差異」と「音韻上の差異」の食い違い（構造言語学でいう「音素」と「異音」の関係）によく現れている。音声学的表示が普遍文法で規定されるのに対して音韻表示は個別言語の文法である。音声学上のどの違いを「有意義な違い」とした違いを無視するのは個別言語の文法、つまり最終的には各個人の脳が決めることである。この判断が同じであれば一般に「同じ言語」と呼ばれる。多くの場合は脳の判断も「音声学的根拠」に則るが、脳が極度に「独断的」に判断を下す場合もある。たとえば、「異形態」の音声形の違いにしばしばみられるように、音声学的な説明がつけ難い場合もある¹³⁾。いずれにせよこのような特性は一方では脳の「記憶」の特性とかかわる。語彙の情報や文法がどのような形で実際に脳に記憶されているかの解明はある意味で言語学の究極的な目標であるが、実際にはまだほとんど具体的なことはわかっていない。しかし、

記憶の一つの特徴として「ファジー」であることがあげられる。視覚的、聴覚等感覚を通じた刺激は常に変化するなかで「同じ人」「同じ物」の判断には、細部を無視した「いい加減さ」で記憶されていることが欠かせないからである。

このような独断的判断が可能なのは言語は「記号」であるからである。実態との対応は「脳」がつける。これが言語は「恣意的」と言われる所以である。実際には実態としての違いがなくてもヒト（またはヒトの集団が）違うと認識したことの証が記号が生まれた瞬間である¹⁴⁾。したがって、言語的に違いがあれば、どのような理由で差異化が行われたのか、差異化、記号化自体は無意識的な行為であると考えられるので、その「理由付け」が結局のところ社会言語学の行っていることであり、言語自体の構造の問題とは直接関係がないといえる。記号化については逆に記号上の判断が現実を規定する面もある。言語の分節化、範疇化と呼ばれる機能で、しばしば社会言語学では「言語相対論」として登場する。

8. 結語

形式的な演繹体系としての文法が言語能力であるとされ、形式を軸に記述と説明の両方の妥当性をみたく文法理論が模索されたのが1950年代からの生成文法理論であるが、特に音韻論では古典的標準理論とされるSPE出版時にはすでに言語の機能面からの実質的な「説明」が不可欠であるとの指摘がなされ、この方面からの普遍性をいかに形式的な文法に組み入れるかということが課題の一つであった。特にKiparskyは当初から共時的文法や歴史的变化にはたす普遍文法の重要性を強調しつつ、子どもの言語習得や言語変化などの経験的現象に基づいて、純粋に形式を基準とする数量的な評価基準だけでは言語学的に重要な一般化を説明する上で十分でないことを示し、言語の実質的な機能面からの評価が理論に組み込まれるべきことを強調してきた。言語の運用面に基盤を置く機能的説明は言語習得や言語変化あるいは言語運用に注目するので、社会言語学的な記述もしばしば言語外の要因として重要になる。しかし言語現象を社会や状況などにかかわる要因との相関関係として記述しても、説明に使われる概念はあまりにも曖昧で十分に定義されたものではないことが多く、ほとんどの場合は「傾向」として説明されるに留まる。「傾向」がしばしば大まかな意味で多くの言語に共通した特徴を持ち、それ故言語間の比較対照も研究の対象となるが、これが可能なのはヒトの言語の持つ普遍性、言い換えれば言語機能があるからである。したがって、このような「傾向」の真の説明はいわゆるI-言語を生み出す言語能力やその他の関連する認知能力として説明できてこそ自然科学としての言語学が成立するとも言える。英語の-t/d脱落現象は規則の適用が確率的になされる例として、いわば反形式主義の立場から早くから注目されてきた。しかしながら、SPE以後さまざまな理論上の進展があり、このような運用や機能上といった実質面の制約を形式的に捉え

214 (704)

ることがある程度成功するようになった。ここでは、社会言語学上のさまざまな説明をヒトの認知能力に関わるより根源的なレベルにまで深める必要性といくつかの言語理論の成果からその具体化の例を見ることで、社会言語学が目指すべき方向性について考察した。

注

- 1) Coulmas 1997, p. 5.
- 2) Coulmas (ed.) 1997.
- 3) It may first glance seem incredible to non-linguists that linguistics cannot define such essential and basic concepts in purely linguistic terms. The purpose of this chapter is to explain why the notions of language and dialect are fundamentally social and not linguistic constructs. (p.1)
- 4) Chomsky (1987) p. 24.
- 5) 自然科学の考え方については黒田成幸 (1999) でも議論されている。
- 6) Chomsky (2000) p.169.
- 7) このように「言語」を非常に限定的に考えることについては同じ意見でも、例えば Liberman 等の研究者は調音／知覚システムも FLN の一部であると考えているし、概念／意図なども含まれるべきであるとする見解もある等の別の可能性についても言及されているが、ここで主張されている HNF には演算システムしかないとする根拠については特に示されていない。
- 8) 例えば、中尾・日比谷・服部 (1997) では英語の語末の [t, d] 脱落現象や日本語のガ行鼻濁音の破裂音化現象など、「言語内部の要因」と「社会的要因」に分けて説明を行っているし、郡司・西垣内 (2004) でも (第 6 章「ことばのバリエーション」この章の執筆担当は松田健次郎) でもガ行子音については「鼻濁音をめぐり一般化」制約として、言語内部の要因が社会的要因とは別に説明されている。「言語内部の要因」とは言語が共時的に構造と体系を有し、これが言語変化を誘発したり、逆に阻止したりという機能を果たすと考えることを意味する。構造言語学の用語を用いればいわゆるシンタグマティック (syntagmatic) とパラディグマティック (paradigmatic) の両軸を中心にした言語の構造、体系が言語の変化を意味で制御するという考え方である。つまり、例えば、ガ行鼻子音に関する現象であれば、前後の音環境がシンタグマティックな見方で、音声学的な理由によって音変化が引き起こされるのに対して、マ行、ナ行の破裂音と鼻音との体系的平行関係としてのパラディグマティックな関係も何故そのような音変化が許容されるのか、また別の変化でないのかを説明すると考える。
- 9) この図では“→”をどのように解釈していいのかが不明で、この点全体でどのようなメカニズムを意図しているのか理解し難い。
- 10) Weinreich, Labov, and Herzog (1968) で使われた用語。
- 11) Noam Chomsky and Morris Halle, 1968, *The Sound Pattern of English*.
- 12) Kiaprsky (2008) ではこのようなケースは「不完全学習」(imperfect learning) と呼ばれている。
- 13) 自然音韻論 (Stampe, 1973) で「過程」に対して「規則」と呼ばれる、いわゆる「学習」の対象とされる音韻変化などが代表的な例。
- 14) より正確に言えば新たな記号ができるのと差異化とは同時で、どちらか一方あるいはそれぞれが個別に実態として差異化されていて、それに名前がつく、あるいは先に名前があるというのではなく、記号化と実態の差異化は同時である。

参考文献

- Anderson, R. Stephen. 1985. *Phonology in the twentieth century*. Chicago: University of Chicago Press.
- Anderson, R. Stephen, and David W. Lightfoot. 2002. *The language organ: Linguistics as cognitive physiology*, Cambridge University Press.
- Anttila, Arto. 2004. Variation and phonological theory. In *The handbook of language variation and change*, edited by J. K. Chambers, Peter Trudgill, and Natalie Schilling-Esters, Blackwell Publishers Ltd. 206-243.
- Bloomfield, L. 1933. *Language*. New York: Holt.
- Boersma, Paul. 1997. *How we learn variation, optionality, and probability*. Ms. University of Amsterdam. [ROA-221, <http://ruccs.rutgers.edu/roa.html>]
- Chomsky, N. 1964. *Current issues in linguistic theory*. The Hague: Mouton.
1965. *Aspects of the theory of syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.
1986. *Knowledge of language*. New York: Pantheon.
1987. *Language in a psychological setting*. Sophia University. 加藤泰彦・加藤ナツ子訳『言語と認知—心的実在としての言語』2004. 秀英書房.
1993. *Language and thought*. Moyer Bell. 大石正幸訳「言語と思考」. ノーム・チョムスキー、黒田成幸. 1999. 『言語と思考』松柏社.
1995. *The minimalist program*. Cambridge, MA: MIT Press.
2000. *New horizons in the study of language and mind*. Cambridge University Press.
- Chomsky, Noam and Morris Halle. 1968. *The sound pattern of English*. New York: Harper & Row.
- Coulmas, Florian, (ed.) 1997. *The handbook of sociolinguistics*. Blackwell Publishers Ltd.
- 郡司隆男・西垣内泰介 2004. 『ことばの科学ハンドブック』研究社.
- Guy, Gregory. 1991a. Contextual conditioning in variable lexical phonology. *Language variation and change* 3: 223-39.
- 1991b. Explanation in variable phonology. *Language variation and change* 3: 1-22.
1994. The phonology of variation. In Beals et al. (eds.), *CLS 30, vol. 2: The parasession on variation in linguistic theory*, Chicago: CLS. 133-49.
1997. Violable is variable: Optimality theory and linguistic variation. *Language variation and change* 9: 333-47.
- Hauser, Mark, Noam Chomsky, W. Tecumseh Fitch. 2002. The faculty of language: What is it, who has it, and how did it evolve? *Science* vol. 298: 22, November. (www.sciencemag.org)
- 池谷裕二 2007. 『進化しすぎた脳』講談社.
- Jackendoff, Ray. 1992. *Language of the mind: Essays on mental representation*. MA: MIT Press.
1993. *Patterns in the mind: Language and human nature*. Harvester Wheatsheaf.
2002. *Foundation of language: Brain, meaning, grammar, evolution*. Oxford University Press. 郡司隆男訳『言語の基盤—脳・意味・文法・進化』2006. 岩波書店.
- Kiparsky, Paul. 1972. Explanation in phonology. In *Goals of linguistic theory*, edited by Stanley Peters. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, Inc.
1988. Phonological change. In *Linguistics: The Cambridge survey*, vol. 1, edited by F. Newmeyer. Cambridge University Press. 363-415.

1994. *An OT perspective on phonological variation*. Handout from NWAV-23, Stanford University.
1995. The phonological basis of sound change. In *The handbook of phonological theory*, edited by F. Newmeyer. Blackwell Publishing Ltd.
2008. Universals constrain change; Change results in typological generalizations. In *Linguistic Universals and Language Change*, edited by Jeff Good. Oxford University Press. 23-52.
- 黒田成幸 1999. 「文法理論と哲学的自然主義」ノーム・チョムスキー・黒田成幸 『言語と思考』1999. 松柏社.
- Labov, W. 1966. *The social stratification of English in New York City*. Washington DC: Center for Applied Linguistics.
1989. The child as linguistic historian. *Language variation and change* 1. 85-97.
- Milroy, James and Lesley Milroy. 1997. Varieties and variation. In *The handbook of sociolinguistics*, edited by Coulmas. Blackwell Publishers Ltd. 47-64.
- 中尾俊夫・日比谷潤子・服部範子 1997. 『社会言語学概論』くろしお出版.
- Romaine, Suzanne. 1994. *Language in society: An introduction to sociolinguistics*. Oxford University Press. 土田滋, 高橋留美 『社会のなかの言語』三省堂. 1997.
- Sapir, Edward. 1921. *Language*. New York: Harcourt, Brace & World.
- Stampe, David. 1973. *A dissertation on natural phonology*. Doctoral dissertation: University of Chicago. [Published by Garland Press, New York, 1979.]
- Thomas, Linda, S. Wareing, I. Singh, J. S. Peccei, J. Thornborrow, and J. Jones. 1999. *Language, society and power: An introduction*. Routledge.
- Trudgill, Peter. 1974. *Sociolinguistics: An introduction to language and society*. Penguin Books Ltd. 土田滋訳 『言語と社会』岩波書店. 1975.
- Weinreich, Uriel, William Labov, and Marvin Herzog. 1968. Empirical foundations for a theory of language change. *Directions for historical linguistics*, edited by W. Lehmann and Y. Malkiel. University of Texas Press.
- 養老孟司 1989. 『唯脳論』青土社.
2002. 『人間科学』筑摩書房.

（三宅 正隆，立命館大学国際関係学部教授）

Language Variation: *I*-linguistics and Sociolinguistics

Most sociolinguistics textbooks stress that there is no precisely definable notion of a “language” or a “dialect,” i.e., one cannot show in any non-circular way that a given sentence is a sentence of English or Black English or Creole. Despite this, the major body of textbooks focuses on the correlation between the use of languages and dialects on the one hand, and external factors and social variations on the other. In reality, the set of sentences in use in a speech community is not a coherent object of study because it corresponds to the output of a diverse range of grammars that each individual has in his or her mind/brain. Accordingly, if we want to develop a genuine science of language, this must be concerned with the *I*-language notion of grammars, the properties of a person’s “language organ.” Therefore, the task of linguistics is to translate vague notions used in sociolinguistics or functional explanations into more precise, UG-based terms. As Chomsky put it, “the basic problem is not one of characterizing what people do; it is rather one of characterizing what they know.”

Language variation is one of many interesting topics from both an *I*-linguistic and sociolinguistic perspective. It is interesting particularly to theoretical linguistics because the capacity to produce “orderly heterogeneity” in output can be regarded as part of the human linguistic system. The *-t/d* deletion case in English which has been intensely studied from various approaches is a good example of knowing the extent to which formal explanation of language variation is possible. This paper is devoted to clarifying these points.

(MIYAKE, Masataka, Professor, College of International Relations, Ritsumeikan University)